

吉備国際大学  
政策マネジメント学部研究紀要  
第4号, 1-9, 2008

## 李喬『寒夜三部曲』における日本語表現法及びその時代性

岡崎 郁子

The Historical Background to Japanese Language Expressions in Li Qiao *Hanye Sanbuqu*  
(寒夜三部曲 Wintry Night)

Ikuko OKAZAKI

キーワード：客家、台湾文学、日本語、翻訳

### はじめに

翻訳に着手してより足かけ三年の年月を経て、李喬著『寒夜三部曲』の日訳本（簡約本）を三木直大教授（広島大学）と筆者の共訳で二〇〇五年年末に出版した<sup>1)</sup>。台湾作家李喬が小説を執筆する際のテーマは、台湾の歴史事実を凝視することに他ならず、『寒夜三部曲』はその代表作といえる。時代は清朝による台湾統治の末期から、日本統治の全時代までの半世紀以上にわたり、主な舞台は苗栗県大湖郷を中心とする山村地帯で、そこに入植して山を拓くために奮闘する客家人一家の三代にわたる壮大な歴史ドラマである。

中に時代を反映して大量の日本語が出てくるが、これまでの台湾作家にはない多様な表現法を試みている。それを種類別に分類し、且つなぜこれほどまでの複雑怪奇な日本語が出現するのか、その意図するところと時代背景を探るのが本稿の目的である。翻訳を通じて知り得た李喬の日本語表現法、及びその時代性に逼ってみたい。

### 一、李喬の『寒夜三部曲』と簡約本『寒夜』との関係

まず、日本で翻訳・出版された簡約本『寒夜』と『寒夜三部曲』との関係であるが、李喬は雑誌や新聞に連載した『寒夜』『荒村』『孤灯』の三部作を、一九七九年から一九八一年にかけて遠景出版より単行本として出版した後、二〇〇一年七月に同出版社より簡約本『大地之母』を出版した。これはアメリカのコロンビア大学で英訳本が出版されるのに合わせたものである<sup>2)</sup>。簡約本は『荒村』を除き、『寒夜』と『孤灯』をそれぞれ約半分に簡約したものだ。今回日訳したのはその『大地之母』を底本としたため、『荒村』については日訳からは窺い知ることができない。

次に、物語に出てくる大量の日本語に関してだが、筆者がこれまで手がけてきた劉大任の長篇小説『浮游群落<sup>3)</sup>』や、鄭清文の創作童話『燕心果<sup>4)</sup>』などの翻訳と比べると、『寒夜三部曲』は全く異なる困難があった。中国語文の中に客家語、閩南語、先住民語（主にタイヤル語）、日本語が混在しているのだ。客家語や閩南語は、北京語と語彙が異なっているも

何とか漢字に置き換えることは可能だし、作者自身の注釈もいくつか載せてあるので困難というほどではない。先住民語は音訳して漢字を当てているため、それを作者に問い合わせれば意味の解説はできる。最も困難を極めたのは日本語だ。そのまま日本語が挿入されていれば、日訳する場合はそっくり写せばよいので何の問題もないが、単語や会話の中に音訳された日本語が山と出てくる。それも単に音訳のみであれば、何度も読んでいくうちに次第に日本語らしく聞こえてくる。ところが『寒夜』では音訳のみの場合、音訳に意識が含まれる場合、その意識にも日中同義語あり、日中で意味の異なる場合あり、さらには一つの単語に意図的な含意を忍ばせている場合、と複雑怪奇なのだ。以下、三部作それぞれの時代と物語、及び中に出てくる日本語について見てゆく。

### 1. 『寒夜』とその時代

三部作の第一部『寒夜』では、十九世紀末に彭阿強を長とする客家の一家が、苗栗県大湖郷の蕃仔林（蕃族の林の意）に入植し、未開の山を開墾する奮闘が描かれる。

十六世紀にはじまった中国大陆から台湾への移住は、主に福建南部閩南の泉州と漳州の漢族系が中心であった。明王朝は台湾を領土とせず、オランダ、スペイン、鄭氏政権の台湾占領を経て、清朝が台湾を領有するのは一六八四年のことである。そのとき、清朝政府による渡航制限令が出たが、中に広東東部は海賊の巢窟であるため、台湾渡航を禁ずるとの一項があった。広東東部に多く居住するのは客家と称される人々であり、その制限令のために閩南の泉州と漳州に比べて、客家の台湾移住が大幅におくれたといわれている。客家の移住禁止が撤廃されるのは一七六〇年のことであり、彭阿強が蕃仔林に入植した十九世紀というのは、すでに開墾できる土地も極端に少なく、さらに奥地へと開発の道を拓くしかな

かった。苗栗県大湖郷の蕃仔林はその名が示す通り、蕃族、すなわち先住民の居住する奥深い山林であった。

先住民は多部族に分かれていたこともあって、台湾に先住民による政権や王権が樹立されることはなく、常に外来の政権からの圧迫を受けていた。福建や広東からの漢族系移民が大量に台湾に居住するようになると、先住民は次第に中央山脈の山間部に追いやられ、海洋民族であるヤミ族を除く先住民はやがて山岳民族のようになっていった。移住民の侵犯や搾取に反発して、先住民が決起することもあった。彭阿強一家が定住を決めた蕃仔林は、正に先住民の居住地域と境界を接する山村地帯である。境界といっても、はっきりした目印があるものではなく、実際は隣接しているところも多かった。

清朝初期の統治がはじまった頃には、先住民の居住地域と移民居住地域との範囲はすでに決められていて、明確な区分はないながらも、その境界線を「隘勇線<sup>あいゆうせん</sup>」といった。先住民の襲撃にそなえる防備員を隘勇と称し、守備地帯に設置した隘勇寮に駐屯していた。『寒夜』の中では、彭阿強の長女順妹の再婚相手である黄阿陵と、燈妹の夫となる劉阿漢が隘勇である。彭阿強が「命がけの隘勇のような生活はやめろ」「田畑を耕すことこそ男の本分だ。隘勇の生活なんてびくびくのし通しじゃないか」と二人を諭す場面が出てくる。貧しさゆえに隘勇になったのだが、出草（先住民の首狩りの風習）に遭うかもしれない危機が常に目の前にあった。

自分たちの土地を持ち、少しずつ開墾も進んできたところで、清朝末期の腐敗した役人と結託した地主が正式の開墾許可証を入手し、蕃仔林の農民たちを小作として搾取しようと企む。十九世紀末の台湾において、清朝は「保甲」と呼ばれる人口と土地制度を管轄する制度を実施していた。十戸を一甲とし、十甲を一保として、甲には甲長、保には保正をおき、連座制をしいて住民を把握しようとした。土地をめ

ぐって「大租戸」と「小租戸」という地主が二人いるのと同じ所有形態であり、その二人の地主それぞれに収穫物を収める小作人がその下にいた。彭阿強一家は誰のものともしれない未開の山林を開墾して、ようやく自分の土地といえるものを所有したかに見えたが、そこに突然不正入手した開墾許可証をちらつかせて地主と名乗る葉阿添が登場してくる。

やがて台湾の人々にとっては思いも寄らなかった、日本人が台湾を統治する時代へと移る。「日本という東の蛮人（原文は「東洋蕃」）が台湾を統治するらしい」との噂が、蕃仔林の農民たちの耳にも入ってきた。彼らは日本人を「台湾の東海上の島に住む野蛮人らしい。この野蛮人は上半身裸で、木の葉で下半身をおおい、ぼさぼさ頭で、背は低くたくましい体をしている。薄い刃の長刀をよく用い、殺生を好む。また人の心臓を生のまま食らうという」と噂しあった。清朝に領有されていた当時の台湾人にとっては、日本に対する知識もなく、全く未知の存在だったということだろう。

日本は明治維新後、台湾に食指を動かしていたが、一八七一年の「牡丹社事件<sup>5)</sup>」をきっかけに台湾出兵の意思を明確に示し、日清戦争を経て、ついに一八九五年四月十七日に結ばれた日清講和条約をもって、台湾を日本の植民地とした。ここに先住民を含む三百万を超す台湾の住民は、自分たちが捨てられ放り出されたことを知ったのである。すると狡猾な地主は、今度は新たな統治者である日本人に取り入り、小作人たちから土地そのものを取り上げようと画策してきた。そして台湾の人々は、はじめて日本人とも対面するのであるが、そこではじめて耳にした日本語は、何と「チャンコロ」という野卑なことばだった。これは日本人巡査が客家農民である彭阿強に対して発した第一声であった。

彭一家の長である阿強はついに地主と対決、地主をかみ殺してしまい、自らも山林に逃げこんで、客家農民の運命を象徴する首吊りの木（原文は「吊頸

樹」）の下で最期を遂げる。日本人がやって来たことで、再び外来政権が台湾を統治する事態に至り、新たな困難と悲劇の幕開けを予想させる。この『寒夜』では、最後半に日本人が登場するだけなので、出てくる日本語はごくわずかである。

## 2. 『荒村』とその時代

第二部『荒村』の時代は一九二〇年代、彭家の<sup>トン</sup>養媳燈妹とその婿になった劉阿漢、二人の息子である明鼎を軸に、植民地統治に抵抗する農民たちの闘争が描かれる。日本の台湾統治は、漢族系台湾人や先住民による武力抵抗が激しかったため、それを制圧することからはじまったといっても過言ではないが、鎮静化に向かうどころか次第に活発になっていった。第四代総督の児玉源太郎とともに台湾に赴任した民政局長（のちに民政長官）の後藤新平は、大いに手腕を発揮し、武力抵抗の鎮圧に力を注ぐ一方で、土地や人口の調査に着手、台湾統治の政策と法制を立案した。

土地に関しては、清末から続く耕地の二重所有形態を近代的な制度へと移行させた。「大租戸」に補償金を出すことで、「小租戸」が事実上の地主となったのである。それでも漢族系台湾人による武力抵抗はあとを絶たず、「北埔事件（一九〇七年）」「林杞埔事件（一九一二年）」「羅福星事件（一九一三年）」と続くが、一九一五年に起こった大規模な「西来庵事件」が鎮圧されたのを機に終息し、『荒村』で描かれる合法的な政治抵抗運動へと移ってゆく。

一九二一年には台湾文化協会が成立、続いて二五年には農民組合も成立したことによって、農民たちの意識に変化が表われはじめ、それがやがて抵抗運動へと発展してゆくことになる。これらの活動の目的は、正にその台湾人意識の啓蒙、知識の向上、日本の植民地支配を批判する点にあったため、民族運動の様相を呈していた。しかし、台湾文化協会の下には右派左派の区別なく結集していたとの感否め

ず、やがて分裂の道をたどる。その間、日本政府の抑圧が執拗に続いていたことはもちろんである。そしてついに、二九年の総督府が行なった台湾文化協会や農民組合等左翼組織に対する全島の弾圧事件で、劉阿漢が逮捕されてしまう。拷問の末、阿漢は警察によって薬物で謀殺される。ここでは阿漢と妻燈妹の夫婦愛及び親子の情愛が、苛酷な運命の中でも変わらぬ強い絆として描かれていて、読者の胸を打つ。

簡約本では省略されてしまった『荒村』だが、正に日本統治時代における総督府に対する台湾農民の抵抗運動を描いたものであるため、日本語による会話が随所に出てくる。本稿では簡約本には出てこない『荒村』の日本語もできるだけ挙げておいた。当時の日本人が植民地台湾で、当地の台湾人に対してどのような日本語を使っていたのかがよくわかるものとなっている。

### 3. 『孤灯』とその時代

第三部『孤灯』で描かれるのは、劉家の残された人々の太平洋戦争末期を舞台とした物語である。劉明鼎は、後に大湖農民組合支部長となったことで入獄し、父の阿漢と同じ酷刑によって死んだ。残された明鼎の弟たちは、日本の敗戦が色濃くなった頃、兵卒や軍夫として徴用される。日本政府は本来台湾人に兵役を課さなかったが、次第に兵員が不足してくると台湾人も大量に前線へと送られることになる。志願の名のもと徴兵がはじまったのが一九四二年四月からで、「陸軍特別志願兵」「高砂義勇隊(先住民の部隊)」「海軍特別志願兵」と続き、一九四四年九月には「徴兵制」が施行された。

明鼎の弟たちは南方に連れて行かれ、終戦後はジャングルを逃げまどう。一方台湾では、母燈妹が息子たちを案じながら、辛酸と苦難の連続だった人生に静かに幕を降ろすのだった。この三部作を読了して思うのは、人の一生の何と崇高なることか、ということだ。人は懸命に生きて、苛酷な運命にも立ち向

かってゆく気概を失わない。ただ、『寒夜三部曲』では最後にはみんな死んでしまう、それが何とも辛い。

『孤灯』では、南方に出征した劉阿漢と燈妹の息子明基が、現地で日本軍人と交わす日本語が頻繁に出てくる。植民地台湾において日本人と台湾人は、支配する側と支配される側という立場にあったが、明基と増田正一少尉のように心を通わせる関係も出現する。戦場という極限の場で互いを思いやる二人にとって、超えることのできない恩讐が存在することはあっても、人間として友情らしきものが芽生えることもまた真実であろう。そこでも日本語は大きな役割を果たす。強制された日本語ではあっても、明基が日本語を話せなければ増田との意思疎通もなかったかもしれない。増田は明基に「きみのような台湾の青年に出会えて、おれはとてもうれしい」と声をかけ、明基も「あなたはずっとほんとうの勇氣を示してくれました」と応える。反対に、同じ客家出身でありながら野沢三郎を名乗って威張り散らす三本足(日本人に取り入る台湾人のことをこう呼んだ)の黄火盛に対する明基の態度は厳しい。普段は日本人面して日本語しか話さないが、死に直面して助けを求めるときには、同郷を強調して摺り寄ってくる黄火盛を明基は嫌悪する。また、客家人である明基が閩南人と話す時もたぶん日本語であったろう。簡約本では省略されているが原本の『孤灯』には、先住民である高砂義勇隊も出征して南方に共にいたとあるから、彼らとも日本語で話していたであろうことは容易に想像がつく。李喬は生きた会話を登場させることによって、それら台湾を構成する複雑な民族や言語及び歴史などを含むその時代に逼ろうとしたのである。その結果が中国語文の中に客家語、閩南語、先住民語、日本語を混在させる手法を李喬に選ばせたということだろう。李喬自身にとっても大変な労力だったと思う。戦後、日本人は台湾から姿を消したが、客家人と閩南系台湾人、或いは漢族系台湾人と先住民が会話をする場合、その共通



語として日本語が長く残り、彼らの交流を助けてきたのも紛れもない事実である。以上の背景を踏まえながら、物語に表われた日本語の表現法を具体的に挙げてゆく。

## 二、『寒夜三部曲』における日本語表現法

### 1. 音訳

オリンピックを「世界運動大会」と意識するか「オリンピック」と音訳するかでニュアンスは大いに異なる。「オリンピック」の漢字には意味を込めないからである。『寒夜三部曲』で李喬は大胆にも日本語を音訳する手法を試みた。「可訥強割烙、紫累哪」（『寒夜』）は日本語の「このチャンコロ、ずるいな」の音訳で、李喬自ら中文訳した「你這個清国奴、很狡猾」も文中にある。「チャンコロ」というのは、日本人が中国人を侮蔑して呼ぶもので、「中国 Zhong guo」の訛音である。『寒夜』の日訳に当たって、共訳者は「チャンコロ」は現在の日本では差別用語であり、作者の李喬が「清国奴」を使っているのだから「清国奴」と日訳しようと主張したが、筆者は当時の日本人が使っていたのは「チャンコロ」以外にはありえないとの考えから敢えて「チャンコロ」を強く押した。歴史を正しく伝えることも、翻訳者の務めの一つであろうからである。余談ながら、日本語に全く同じ発音の「ちゃんころ」ということばがある。「ちゃん」は「錢 qian」の唐音、「ころ」は「犬ころ」とか「石ころ」と同様接尾語で、「小さいもの」「取るに足らないもの」の意、つまり「ちゃんころ」は「<sup>ぜに</sup>錢（お金）」の別名だが、江戸時代など古い書物<sup>6)</sup>には出てきても現在ではあまり使われることはない。以上の例からも日本語は当然のことながら、中国から文字が伝わって以来、その音も大なる影響を受けていることがわかる。

上記のことばは、領台初期日本人巡査が客家農民彭阿強に対して発したもののだが、作品中使われている日本語は軍隊用語をはじめ、どちらかという品

性に欠ける命令口調や人を罵ることばが多い。

軍隊用語：「啞斯楣、球啞嘅」は「休め、気をつけ」で、中国語の「稍息、立正」の意。「卡息啦、覓其」は「<sup>かしら</sup>頭、右」で、「向右看（敬礼）」の意。「拿喔累」は「直れ」で、「放下（恢復原状）」の意。「哈饑味」は「始め」で、「開始」の意。「米去木給、時事味」は「右向け、進め」で、「向右転、齊歩走」の意。（以上『孤灯』）。

人を罵ることば：「巴卡摸訥」は「馬鹿者」で、「笨蛋傢伙」の意。「巴卡亞魯」は「馬鹿野郎」で、「笨蛋傢伙」の意。（以上『荒村』）。「鳴魯曬、苛啦」は「うるさい、こら」で、「好煩、這傢伙」の意。「奇沙瑪」は「貴様」で、「你」の意。（以上『孤灯』）。

音訳の関係からか、きちんとした文は少なく、単語、接続詞、断片的なものが多い。たとえば「搭味」は「駄目」で、「不可」の意。「米那尚磨…」は「皆さんも…」で、「大家那就…」の意。「卡那拉茲」は「必ず」で、「一定」の意。「逗悉達？」は「どうした？」で、「怎麼了？」の意。（以上『荒村』）。「啲咯戲」は「よろしい」で、「好了」の意。「哈鴨哭」は「早く」で、「趕快」の意。「甘拔力」は「頑張れ」で、「加油」の意。頑張るには力も必要なのかもしれない。「哈伊」は「はい」で、「是」の意。「伊漠」は「芋」で、「蕃薯（指台湾島）」の意。「西卡西」は「しかし」で、「可是」の意。「搭斯給得」は「助けて」で、「救命」の意。「喔卡尚」は「お母さん」で、「媽媽」の意。「阿里阿朶」は「有難う」で、「謝謝」の意。（以上『孤灯』）。

音訳の最初に挙げた「可訥強割烙、紫累哪」などは、文中に中文訳も見えるため理解に支障はないが、ここに挙げた他の音訳の単語は文前後をしっかりと読み込み把握しなければならない。読者は根気を要求される。日本人には日本人の対話の仕方があるはずで、それをすべて中国語で表記することに作者は違和感があったようだ。それも植民地となった台湾へ乗り込んできて、被統治者を相手に使う日本語であれば品性からはほど遠いはずだ。口汚く罵ったり、命令口調の日本語がどのようなものか、幼い李喬は両親

や村の長老たちから聞いたのかもしれない。それに『孤灯』の時代背景は太平洋戦争末期のため、日本人同士、及び日本人と台湾人の対話も軍隊用語が主流を占めることになる。

## 2. 音訳 + 意訳（日中同義語）

次に李喬が挑戦したのは、音訳に意識を加えることにより、音訳のみに比べ理解を助ける方法だ。

「那尼？畜牲」は「何？畜生」で、中国語の「甚麼？畜牲」に当たる。「賽賽悉得、契約酷喔、訂律茲悉得開」は「反省して契約を定律して来い」で、「回去反省、趕快簽訂契約吧」(作中にある中文訳)。「契約」「訂律」は日中同義語。(以上『寒夜』)。「卡這、宜哪」は「風、いいな」で、「風、真好」の意。「宜」は音と意味を兼ね備える。「自殺西瑪是卡拉…」は「自殺しますから…」で、「要自殺、所以…」の意。「朝糜西」は「朝飯」で、「早飯」の意。極めつきは「狗沅」、日本語は「ご飯」、中国語は「飯」だが、日本人の食すご飯は犬の飯との意が込められている。(以上『荒村』)。「糞多西」は「糞」で、「犢鼻褌」の意だが、「糞」に音と意味を込めた。「阿那搭、愛斯嚕」は「あなた〔を…筆者補足。以下同様〕、愛する」で、「我愛你」の意。「安心西那曬」は「安心しなさい」で、「放心吧」の意。「战友訥冥福喔伊祈…」は「战友の冥福を祈って…」で、「祈祷战友的冥福…」の意。「綺麗嗒那」は「綺麗だな」で、「好漂亮」の意。「美珍拉西」は「珍しい」で、「珍貴」の意。「俺日本兵働奈」は「俺〔は〕日本兵じゃない」で、「我不是日本兵」の意。「武士訥劍得決闘嘎？」は「武士の剣で決闘〔する〕か？」で、「用武士刀決闘嗎？」の意。(以上『孤灯』)。

日本語と中国語に共通する同義語を使用すると同時に、日本語の助詞「の」「で」「を」「は」に当たる漢字を「訥」「得」「喔」「哇」と統一することにより、読者が読み進めてゆく中で徐々に理解できるように工夫されている。

## 3. 音訳 + 意訳（日本語または中国語）

日本語の対話に日中同義語を散りばめる方法は、読者を大いに助けてくれるが、その単語が日本と台湾で意味が異なる場合は少々厄介だ。「那開拉吧、苛戮死啁、不法子訥野郎」は「〔そうで〕なければ殺すぞ、無法の野郎」で、「不然就宰了你這不法的傢伙」(作中にある中文訳)の意。(『寒夜』)。「死」は音と意味を掛けているし、「不法子」は中国語、「野郎」は日本語である。「覚悟唏咯」は「覚悟しろ」で、「做好精神準備」の意で、「覚悟」が日本語と中国語で解釈が異なる。「立派那皇軍訥軍官得是」は「立派な皇軍の軍官です」で、「你是卓越的日本軍官」の意。「軍官」は日中同義語だが、「立派」「皇軍」は日本語。「埋葬前呢那尼卡留念遺物喔？」は「埋葬前に何か〔残す遺品は〕？」で、「埋葬前有甚麼留念東西嗎？」の意。「埋葬前」は日中同義語だが、「留念」「遺物」は中国語。「明日訥体力喔儲存」は「明日の〔ために〕体力を〔温存しておけ〕」で、「為了明天保存体力」の意。「明日」「体力」は日中同義語だが、「儲存」は中国語。「大日本軍人得降敵哇奇恥大辱嗒」は「大日本軍人〔なら〕投降〔するの〕は恥だ」で、「大日本軍人投降是可恥的事」の意。「投敵」「奇恥大辱」は中国語。「戦争結束悉達。過來投降唏咯」は「戦争〔は終わった〕。〔出て来て〕投降しろ」で、「戦争結束了。過來投降」の意。「戦争」「投降」は日中同義語だが、「結束」「過來」は中国語。「野沢桑、『明基哥』得遠慮悉得」「野沢さん、『明基哥』〔と呼ぶのは止めてくれ〕」で、「野沢先生、不要叫我『明基哥』」の意。「桑」は音訳、「遠慮」は日本語と中国語で意味が異なる。文字通りを日本語にすると「野沢さん、『明基哥』で遠慮して」となり、日本語としては少しおかしい。(以上『孤灯』)。

この一文に限らず『寒夜三部曲』に出てくる日本語は、軍隊での命令口調を除くと文法的に正しくない言い回しが多々ある。それは李喬自身の日本語能力によるものもあるし、台湾には日本統治下において受けた日本語教育の年数や程度の差により、完璧

且つ流暢に日本語を操る人もいれば、片言で用をなす人もいる。それを考慮して作品に反映させたのかもしれない。他にも「小隊長殿」の「殿（客氣的称呼）」、「最敬礼」の「最」、「非国民（背叛祖国的人）」、「皮肉（挖苦・諷刺）」、「介錯（<sup>かいしゃく</sup>為剖腹自殺者断其頭）」など、日本語としてのみ機能することばもある。これらは日本の歴史、習慣、心情などを知っていれば、より納得のゆくものとなろう。

音訳に意味をもたせた興味深い事例が一つある。それは「訛獸」（『孤灯』）で、日本語の「嘘」、中国語では「假的」の意だが、李喬は次のように説明している。

「訛獸」是説謊之訛。（案：訛獸、常欺人之獸也、見神異經）<sup>7)</sup>

（「訛獸」とは、嘘やでたらめをいうの訛。（案：訛獸は常に人を欺きたる獸なり、『神異經』に見える…筆者訳）

音訳にしろ意識にしろ、日本語の対話部分をでたらめに文字化したわけではないことがこの例からもわかる。

## おわりに

『寒夜三部曲』において李喬が大胆、且つ実験的に大量の日本語の音訳や意識を試みた点に注目し、その多様な表現法を種類別に分類することによって、作者の意図するものを探ってみた。日本語は当時の時代性と深く関わりをもっており、そこには歴史に対する李喬の洞察力と並々ならぬ努力によって、一つ一つのことばを吟味しながら音訳・意識を試みた軌跡が見えてきた。この李喬の意図が成功しているか否かは台湾読者の判断を待つしかないが、日本語を解する読者のほうが臨場感を伴う分理解が深まることは間違いない。しかし、日本の台湾文学研究者、及び中国語を解する日本の読者でさえ、この『寒夜三部曲』はいつかは全篇読まなければと思いつつもなかなか手を付けられない作品であったことが、こ

の度日訳に手を染めてみてはじめてわかった。複雑な人物関係を記憶しつつ、中国語文の中に混じる客家語、閩南語、先住民語、日本語（それも音訳された日本語）を読み解いてゆくのは、生半可な根気や努力では難しいということだ。その意味で簡約本とはいえ、日訳本の上梓が李喬の長篇小説を日本の読者に紹介するきっかけになったとすれば幸いである。

## 【注】

- (1) 李喬著／岡崎郁子・三木直大訳『寒夜』国書刊行会、2005年12月25日。
- (2) 英訳簡約本 Wintry Night は、Columbia University Press より2001年に出版された。訳者は Taotao Liu と John Balcom。
- (3) 劉大任著／岡崎郁子訳・解説『浮游群落』（日訳名『デイゴ燃ゆ—台湾現代小説選別巻』）研文出版、1991年1月28日。
- (4) 鄭清文著／岡崎郁子編訳『燕心果』（日訳名『阿里山の神木—台湾の創作童話』）研文出版、1993年5月31日。
- (5) 1871年、琉球宮古島の住民（66名）が台湾南部に漂着し、12名は辛うじて難を免れたが、54名が先住民（牡丹社部落）に殺害された。これがいわゆる「牡丹社事件」で、日本政府は台湾に食指を動かしていたこともあり、この事件をきっかけに台湾出兵を決めた。
- (6) 井原西鶴が著わした『日本永代蔵』（1688年）に「<sup>ちやん</sup>錢が一文なくて」という文が見える。
- (7) 李喬『寒夜三部曲・孤灯』遠景出版社、1979年10月初版の「後記」517頁に見える。

## 【付録】

### 1. 音訳

- (1) 奇酔／きつい／累
- (2) …斯路卡拉／…するから／這樣所以
- (3) 則西多磨／ぜひとも／無論如何（以上『荒村』）
- (4) 許搭哩／左／左

- (5) 沙其 / さっき / 剛才
- (6) 梭類哇 / それは / 那樣就
- (7) 伊瑪 / 今 / 現在
- (8) 多斯路? / どうする? / 怎麼辦?
- (9) 躲細得? / どうして? / 為甚麼?
- (10) 難嗒? / 何だ〔と〕? / 說甚麼?
- (11) 哪得是嘎? / 何ですか? / 是甚麼〔意思〕?
- (12) 宜給、宜給 / 行け、行け / 去吧、去吧
- (13) 喔侵麻西瑪嗒 / お邪魔しました / 打擾你了
- (14) 悉得路嘎? / 知ってるか? / 知道嗎?
- (15) 得哇… / では… / 那就
- (16) 嗽嘎? / そうか? / 是嗎?
- (17) 嗒卡拉… / だから… / 所以
- (18) 苛累得、伊酷啍 / これで、行くぞ / 就這樣走了
- (19) 苛咧哇… / これは… / 這是…
- (20) 嗒類嘎? / 誰か? / 〔你是〕誰?
- (21) 多訥…? / どの…? / 哪一個…?
- (22) 阿訥… / あの… / 這…、那…
- (23) 啞米咯 / 止めろ / 停止吧
- (24) 磨、伊嚙伊嚙… / もう、いよいよ〔だ〕 / 快要、差不多了
- (25) …嘎哪? / …かな? / 是…嗎? (以上『孤灯』)

## 2. 音訳 + 意訳 (日中同義語) : 〈 〉 は意訳ととれる文字 に筆者が付したもの

- (1) 〈宜〉多類陋嗒 / いい所だ / 真是好地方啊
- (2) 〈俺〉雷拉諾… / 我らの… / 我們這些人的…
- (3) 那尼〈云〉得路? / 何云ってる? / 胡說
- (4) 〈婦〉拉賽 / 帰りなさい / 回去吧 (以上『荒村』)
- (5) 雅〈密〉 / 闇 / 黒市
- (6) 〈儉〉裂 / 取れ / 採取
- (7) 多〈坐〉 / どうぞ / 請
- (8) 〈宝〉厭逗斯路? / 坊や〔を〕どうする? / 孩子怎麼辦?
- (9) 哇達西〈們〉 / 私達 / 我們
- (10) 〈握手〉西哨 / 握手しよう / 握手吧
- (11) 〈感謝〉伊嗒西瑪是 / 感謝致します / 要感謝你
- (12) 〈感謝〉息奈得宜 / 感謝しないでいい / 不必感謝
- (13) 悉〈加力〉 / しっかり / 加油

- (14) 〈同様〉得是 / 同様です / 是一樣
- (15) 〈如何〉得是嘎? / 如何ですか? / 如何?
- (16) 可〈畏〉嘎? / 恐いか? / 可怕嗎?
- (17) 奇沙瑪磨〈日本兵〉倆奈嘎? / 貴様も日本兵じゃないか? / 你也不是日本兵嗎?
- (18) 〈強〉哪 / 強〔い〕な / 好強
- (19) 〈勇氣有真武士〉 / 勇氣〔が〕ある真〔の〕武士〔だな〕 / 有勇氣的真正武士
- (20) 伊〈嘸〉 / いいえ / 不
- (21) 〈特〉格尼 / 特に / 特別
- (22) 〈実〉哇… / 実は / 事実上
- (23) 逗可〈去〉嘎? / どこ〔へ行く〕か? / 去哪裏? (以上『孤灯』)

## 3. 音訳 + 意訳 (日本語または中国語)

- (1) 喃嘎、〈詩吟〉訥樣呢 / 何か詩吟のよう〔だ〕な / 甚麼、像朗誦漢詩一般
- (2) 〈本利〉哇有啲 / 元利はあるよ (損はない) / 沒有損失
- (3) 可訥〈身材〉多嘎? / この身体〔は〕どうか? / 你看我〔身材〕如何?
- (4) 〈睡〉那賽 / 眠りなさい / 睡吧 (以上『孤灯』)

## 【附記】

- (1) 本稿は、2006年7月15日、台湾の国立政治大学外語学院翻譯中心主催「文化翻譯與外語教學－第2屆國際學術研討會」において、「探討李喬『寒夜三部曲』裏之日語表現方法」と題して中文にて発表した論文を、日文に改めるとともに加筆・修正したものである。
- (2) 本稿執筆に当たり、賴松輝氏の修士論文「李喬『寒夜三部曲』研究」(清華大学)1991年の附録「語言對照表」(先住民語・客家語・日本語の漢字表記を對照させたもの)を参照させていただいた。ここに謝意を表したい。



**Abstract**

The celebrated saga *Hanye Sanbuqu* 寒夜三部曲 (Wintry Night) by the Taiwanese novelist Li Qiao 李喬, translated into Japanese by Professor Miki Naotake 三木直大 of Hiroshima University and Okazaki Ikuko 岡崎郁子, was published in late 2005. In his novels Li Qiao pays close attention to the facts of Taiwanese history, and *Hanye Sanbuqu* is a masterpiece of this genre. Set in the fifty year period lasting from the last years of the Qing dynasty to the end of Japanese colonial rule, it is a grand historical drama which depicts the trials and tribulations of a Hakka 客家 family who cleared land and settled in the mountains around Dahu Xiang, Miaoli county 苗栗縣大湖鄉 over the long span of three generations. Li Qiao employs a large number of Japanese words and expressions in ways never attempted by Taiwanese authors before. This paper classifies them into categories, and offers an explanation of why he used so many complicated and strange Japanese words in the context of the historical background.

**Key Words :** Hakka, Taiwanese Literature, Japanese Language, Transliteration

